

第1部◎「共生」への問いかけ

他者と生きる

スリランカ仏教社会から考える

澁谷利雄 *SHIBUYA Toshio*

1. 南アジアでは人間と動物が近い

文化研究のために長年、南アジア諸国を歩き来してきたが、日本と較べて都市でも村でも、概して容易に多様な野生動物を間近に目にするができる。ここでは筆者がもっとも深く関わってきたスリランカの仏教社会の事例を紹介したい。

スリランカは北海道ほどの広さで、人口は約2,000万である。多文化、多民族社会で、仏教徒のシンハラ人が70パーセントを占める。他は、ヒンドゥー教徒のタミル人、ムスリム、マレー人、混血のバーガーなどからなる。

シンハラ人の間では、鳥やリスに食物を与える光景を良く見かける。コロombo中心部でもインコやカッコウの類、キツツキ、オオトカゲが珍しくない。コロombo大学ではカラスやハトの侵入を防ぐために、各教室の窓には鉄格子を設置している。スズメは幸福をもたらす鳥として好まれており、居間の中や玄関口などに巣箱を設置して招き入れている。



庭の布施台にやってきたコガネゲラ

2. 布施のしきたり

紀元前3世紀に仏教が受容され手織り、在家の間でも五戒すなわち、不殺生、不窃盗、不邪淫、不妄語、不飲酒に基づいた仏教道徳が広く根付いている。しかし、不殺生戒を誓うからといって肉や魚を食べないわけではない。自らの手で命を奪うことがよろしくないのだ。また、田舎でのイノシシやシカなど狩猟は限定的であり、鳥は対象としていない。

人間と動物の近さの要因は、不殺生の生活態度以上に、布施の慣習が大きいと思われる。布施とは本来、僧侶に食物を提供することである。檀家の間で当番制になっており、毎日、朝昼の2回、寺院に食事が届けられる。まずは仏陀像に供え、僧が食す。お下がりにはイヌ、ネコ、リス、鳥が食す。神々には蜜入りご飯や果物が捧げられる。この場合、お下がりの一部を参拝者が食し、神の力を体得する。悪霊や死霊には、生肉や酒を与えて慰撫する。祭りや命日の際には、貧者や弱者、旅人に食物を提供する。在家の間ではとりわけカラスに対する布施が重視されている。カラスは人間の運命をつかさどる星神の使いと考えられており、星めぐりの悪い時期に当たっている者は、貪欲で浅ましいカラスに食物を与えて、星めぐりの改善を期待するのである。結果として、これにリスや他の鳥も集まることになる。

数年前、研究休暇の折に滞在したコロombo

郊外の家でも、毎日、老人が庭の一隅に人の食べ残しを置いていた。小さな庭に、カラスやリス、サルのほか、オニカッコウ、ナンヨウショウビン、セイロンミドリワカケインコ、コガネゲラ、シリアカヒヨドリ、クリセタイヨウチョウ、スグロコウライウグイス、オオゴシキドリ、サコウチョウ他、多くの鳥たちを間近に見ることができた。

3. 輪廻の宇宙での連鎖

上座仏教の究極目標は涅槃である。神々も人間も、悪霊や動物も、あらゆるものが涅槃を目指す。しかし、輪廻の宇宙のなかにいる人間にとって、それははるかに遠い目標である。欲望を捨てあらゆる執着を断つことは、至難の道である。大方の在家の者にとっての可能な選択は、せいぜい来世でのよりよい再生を願って、現世で徳を積むことである。

徳を積む行為は、仏陀像に花や線香を捧げることから、寺院への寄進や自ら出家して僧になること、他者への支援など様々ある。なかでも、布施は最も頻度の高いものといえる。あらゆる者が涅槃を目指す、徳を積めるのは人間だけである。人びとは徳を神々に贈って願い事をかなえてもらおう。また、悪霊や死霊にも徳を与え、彼らがもたらす災厄を遠ざける。

しかしながら、悪行を重ねるとこれも蓄積され、来世ではより不幸な生、時には悪霊や動物に転落するかもしれない。最低最悪の生は、イヌあるいはカラスに生まれ変わることである。こうして人間は、現世のみならず前世や来世までの射程のなかで、神々や悪霊、死霊、動物たちとつながっているのである。

4. 様々な他者につながっている

輪廻の宇宙を背景とした連鎖の感覚は、人間と動物の距離の近さだけでなく、特有の社会活動を生み出している。たとえば、老人ホームや孤児院、障害者施設の運営には布施の慣習が活用されている。広く呼びかけて収容者のための食事提供者を募るのである。誕生日や命日に申し出るものが多い。各家庭で調理した食事を持参し、自ら分け与えるのである。また、内戦や自然災害によって生じた難民に対し、多くの篤志家により迅速かつ大量に食料や衣類などが供されている。さらには、仏教道徳とあいまって、不殺生の農法ともいふべき方法がとられている。ある種の鳥が好むエサを稲田のなかに用意し呼び寄せ、周囲にいる害虫駆除をさせる。あるいは、稲田にフクロウのために止まり木を立て、ネズミ捕食を期待するというものもある。

スリランカの仏教社会に暮らす人々の生活態度をみると、現代の日本社会ではみなひとりだけががんばっている、がんばるべきだと考えているように思える。確かに、都会にいる人間だけでこの世が成り立っているかのよう錯覚してしまう。と同時に、イヌ、ネコのペット・ブームがあり、ガーデニング・ブームも続いている。この世とあの世をつなぐものともいふべきトロロやもののけ姫への思いも強い。これまで、野生動物や魍魎魍魎の類は、開発と都市化によって破壊され排除されてきたのだが、人びとは再び他者や野生との新しい多様なつながりを求め始めているように思える。また、脳死と臓器移植の問題を前にして、私たちは死や死後の世界についても再考せざるを得ないときに来ている。